道具にて薄茶をたつべきやと問侍ば、古織公かれに對して、くるしかるまじ、其故は當代の人、何事も茲やうずになれば、から物に取まぎらかす物也、我も人も出來物を所持する事なれば、新物の見事なるにて唐物をもどかれんよりは、薄茶の時花ぬり物吉、乍去座をかへてならば、ふりの替りたる唐物を二度出すべきかと云々、此吟味も利休の傳も同也、

〔槐記續編〕享保十六年三月十九日、參候、昔ヨリカサヂ茶碗ト云コトアリ、三ツモ五ツモ茶碗ヲ重ヂテ出シテ薄茶ヲ立ルコトアリ、此ノ時ノナラヒアリ、上ノ茶碗ノ湯ヲ次ノ茶碗ヘアケテ立ルガ習ナリ、夫故ニ次ノ茶碗ハコボシノ處ニ直スナリ、コボシハ夫ダケ跡ヘ引ナリト仰ラル、○近衛家熙シカシカヤウノコトハ必セヌガヨキナリ、先ハ人々ノシラヌコトハ異風ナルヤウニ思ヒテ、目ヲトムルモノニハミトラルヽガ、センナキコトナリト仰ラル、

〔客之次第〕一うす茶も上座よりのみまはして、一ふくも二ふくものみ侍らん、うす茶の時は、茶わんを返しざまにいたゞきて返し、一禮はなし、

〔茶譜十五〕一利休流客人薄茶呑ヤウ、茶湯ノ時ニ不限、不時ノ砌モ、茶碗ヲ取テ本座ヘシザリ、兩手ニテ茶碗ヲ持、最初一服呑茶ハ戴テ呑ベシ、各一人々々如此、幷薄茶ヲ一服呑テ、仕舞玉ヘト云ハ惡シ、然ドモ又客數ノ砌、二三服呑モ又惡シ、見合可有之コト也、

〔南方錄二〕後の炭之事

後炭立炭

薄茶濟、火相衰たらば、客衆へ一炭と所望し、又客よりも今一炭と所望する事有、炭輕く置て其儘湧立やうにすべし、底つかへたらば輕取べし、客より炭する時、胴炭抔の流れ見能ば殘して、輕く底取て吉、又薄茶をも立る事有、大かたは夫に不及客衆暇乞すべし、炭をして湯わかし、一坐を陽にして客を戻すと云說有り、祝したる心也、さも有べき事か、廻り炭の事、古織已來の事也、露地草庵にて炭の置方抔、面々自慢らしく置並べ、何の益もなき事也、是皆本意の違ひなり、其上利休流